

芥川龍之介

神々の微笑



神々の微笑

或春の夕、 Padre Organtino はたった一人、長いアビ
ト（法衣）の裾を引きながら、南蛮寺の庭を歩いていた。
庭には松や檜の間に、薔薇だの、橄欖かんらんだの、月桂だの、
西洋の植物が植えてあった。殊に咲き始めた薔薇の花は、
木々を幽かすかにする夕明の中に、薄甘い匂を漂わせていた。
それはこの庭の静寂に、何か日本とは思われない、不可
思議な魅力を添えるようだった。

オルガンティノは寂しそうに、砂の赤い小径を歩きな

がら、ぼんやり追憶に耽っていた。羅馬ローマの大本山、リス
ポアの港、羅面琴ラベイカの音、巴旦杏はたんきょうの味、「御主、わがア
ニマ（靈魂）の鏡」の歌——そういう思い出は何時の間
にか、この紅毛の沙門の心へ、懐郷の悲しみを運んで来
た。彼はその悲しみを払う為に、そつと泥烏須デウス（神）の
御名を唱えた。が、悲しみは消えないばかりか、前より
も一層彼の胸へ、重苦しい空気を拈げ出した。

「この国の風景は美しい。——」
オルガンティノは反省した。

「この国の風景は美しい。気候もまず温和である。土人

は、——あの黄面の小人よりも、まだしも黒ん坊がましかも知れない。しかしこれも大体の気質は、親しみ易い処がある。のみならず信徒も近頃では、何万かを数える程になった。現にこの首府のまん中にも、こう云う寺院が聳えている。して見れば此処に住んでいるのは、たとい愉快ではないにしても、不快にはならない筈ではないか？　が、自分はどうかすると、憂鬱の底に沈む事がある。リスポアの町へ帰りたい、この国を去りたいと思う事がある。これは懐郷の悲しみだけであろうか？　いや、自分はリスポアでなくとも、この国を去る事が出来さえ

すれば、どんな土地へでも行きたいと思う。支那でも、
沙室^{シヤム}でも、印度でも、——つまり懐郷の悲しみは、自分
の憂鬱の全部ではない。自分は唯この国から、一日も早
く逃れたい気がする。しかし——しかしこの国の風景は
美しい。気候もまず温和である。……」

オルガンテイノは吐息をした。この時偶然彼の眼は、
点々と木かげの苔に落ちた、灰白い桜の花を捉えた。
桜！　オルガンテイノは驚いたように、薄暗い木立の間
を見つめた。そこには四五本の棕櫚^{しゅろ}の中に、枝を垂らし
た糸桜が一本、夢のように花を煙らせていた。

「御主守らせ給え！」

オルガンテイノは一瞬間、降魔の十字を切ろうとした。実際その瞬間彼の眼には、この夕闇に咲いた枝垂桜が、しだれざくらそれ程無気味に見えたのだった。無気味に、——と云うよりも寧ろこの桜が、何故か彼を不安にする、日本そのもののように見えたのだった。が、彼は刹那の後、それが不思議でも何でもない、唯の桜だった事を発見すると、恥しそうに苦笑しながら、静かに又もと来た小径へ、力のない歩みを返して行った。

×

三十分の後、彼は南蛮寺の内陣に、泥烏須の祈禱を捧げていた。其処には只円天井から吊るされたランプがあるだけだった。そのランプの光の中に、内陣を囲んだフレスコの壁には、サン・ミグエルが地獄の悪魔と、モオゼの屍骸を争っていた。が、勇ましい大天使は勿論、吼り立った悪魔さえも、今夜は朧ろげな光の加減か、妙にふだんよりは優美に見えた。それは又事によると、祭壇の前に捧げられた、水々しい薔薇や金雀花えにしだが、匂っ

るせいかも知れなかった。彼はその祭壇の後に、じつと頭を垂れたまま、熱心にこう云う祈禱を凝らした。

「南無大慈大悲の泥烏須如来！ 私はリスポアを船出した時から、一命はあなたに奉って居ります。ですから、どんな難儀に遇っても、十字架の御威光を輝かせる為には、一步も怯まずに進んで参りました。これは勿論私人の、能くする所ではございません。皆天地の御主、あなたの御恵でございます。が、この日本に住んでいる内は、私はおいおい私の使命が、どの位難いかを知り始めました。この国には山にも森にも、或は家々の並んだ町

にも、何か不思議な力が潜んで居ります。そうしてそれが冥々の中に、私の使命を妨げて居ります。さもなければ私はこの頃のように、何の理由もない憂鬱の底へ、沈んでしまふ筈はございますまい。ではその力とは何であるか、それは私にはわかりませんが、兎に角その力は、丁度地下の泉のように、この国全体へ行き渡って居ります。まずこの力を破らなければ、おお、南無大慈大悲の泥烏須如来！ 邪宗に惑溺した日本人は波羅葦増（天界）の莊嚴を拝する事も、永久にないか存じませぬ。私はその為^にこの何日か、煩悶に煩悶を重ねて参りました。ど

うかあなたの下部、オルガンテイノに、勇気と忍耐とを御授け下さい。——」

その時ふとオルガンテイノは、鶏の鳴き声を聞いたように思った。が、それには注意もせず、更にこう祈禱の言葉を続けた。

「私は使命を果す為には、この国の山川に潜んでいる力と、——多分は人間に見えない霊と、戦わなければなりません。あなたは昔、紅海の底に、埃及エジプトの軍勢を御沈めになりました。この国の霊の力強い事は、埃及の軍勢に劣りますまい。どうか古いにしえの予言者のように、私もこの

霊との戦に……」

祈禱の言葉はいつの間にか、彼の唇から消えてしまった。今度は突然祭壇のあたりに、けたたましい鶏鳴が聞えたのだった。オルガンティノは不審そうに、彼の周囲を眺めまわした。すると彼の真後には、白々と尾を垂れた鶏が一羽、祭壇の上に胸を張った儘、もう一度、夜でも明けたように鬨ときをつくっているではないか？

オルガンティノは飛び上るが早いか、アビトの両腕を拡げながら、倉皇とこの鳥を逐い出そうとした。が、二足三足踏み出したと思うと、「御主」と、切れ切れに叫

んだなり、茫然と其処へ立ちすくんでしまった。この薄暗い内陣の中には、何時何処からはいって来たか、無数の鶏が充満している、——それが或は空を飛んだり、或は其処此処を駈けまわったり、殆ど彼の眼に見える限りは、鶏冠の海にしているのだった。

「御主、守らせ給え！」

彼は又十字を切ろうとした。が、彼の手は不思議にも、万力か何かに挟まれたように、一寸とも自由に動かなかった。その内にだんだん内陣の中には、ほた楳び火の明りに似た赤光が、何処からとも知れず流れ出した。オルガンテ

イノは喘ぎ喘ぎ、この光がさし始めると同時に、朦朧とあたりへ浮んで来た、人影があるのを発見した。

人影は見る間に鮮かになった。それはいずれも見慣れない、素朴な男女の一群だった。彼等は皆頸のまわりに、緒にぬいた玉を飾りながら、愉快そうに笑い興じていた。内陣に群がった無数の鶏は、彼等の姿がはつきりすると、今までよりは一層高らかに、何羽も鬩をつくり合った。同時に内陣の壁は、——サン・ミグエルの画を描いた壁は、霧のように夜へ吞まれてしまった。その跡には、

日本の Bacchanalia は、呆氣にとられたオルガンテイ
ノの前へ、蜃気楼のように漂って来た。彼は赤い篝かがりの
火影ほかげに、古代の服装をした日本人達が、互いに酒を酌み
交しながら、車座をつくっているを見た。そのまん中
には女が一人、——日本ではまだ見た事のない、堂々と
した体格の女が一人、大きな桶を伏せた上に、踊り狂う
ているのを見た。桶の後ろには小山のように、これも亦
逞しい男が一人、根こぎにしたらしい榊の枝に、玉だの
鏡だのが下ったのを、悠然と押し立てているのを見た。
彼等のまわりには数百の鶏が、尾羽根や鶏冠をすり合せ

ながら、絶えず嬉しそうに鳴いているのを見た。そのまま向うには、——オルガンテイノは、今更のように、彼の眼を疑わずにはいられなかった。——そのまた向うには夜霧の中に、岩屋の戸らしい一枚岩が、どっしりと聳えているのだった。

桶の上ののった女は、何時までも踊をやめなかった。

彼女の髪を巻いた蔓は、ひらひらと空に翻った。彼女の頸に垂れた玉は、何度も霰あられのように響き合った。彼女の手にとった小笹の枝は、縦横に風を打ちまわった。しかもその露らわにした胸！ 赤い篝火の光の中に、艶々

と浮び出た二つの乳房は、殆どオルガンテイノの眼には、情欲そのものとししか思われなかつた。彼は泥烏須を念じながら、一心に顔をそむけようとした。が、やはり彼の体は、どう云う神秘的な呪の力か、身動きさえ楽には出来なかつた。

その内に突然沈黙が、幻の男女達の上へ降つた。桶の上に乗つた女も、もう一度正気に返つたように、やつと狂わしい踊をやめた。いや、鳴き競っていた鶏さえ、この瞬間は頸を伸ばした儘、一度にひっそりとなつてしまつた。するとその沈黙の中に、永久に美しい女の声が、

何処からか巖かに伝わって来た。

「私が此処にこもっていれば、世界は暗闇になった筈ではないか？ それを神々は楽しそうに、笑い興じていると見える。」

その声が夜空に消えた時、桶の上ののった女は、ちらりと一同を見渡しながら、意外な程しとやかに返事をした。

「それはあなたにも立ち勝った、新しい神がおられますから、喜び合っておるのでございます。」

その新しい神と云うのは、泥烏須を指しているのかも

知れない。——オルガンテイノはちよいとの間、そう云う気もちに励まされながら、この怪しい幻の変化に、やや興味のある目を注いだ。

沈黙は少時破れなかった。が、忽ち鶏の群が、一斉に鬨をつくったと思うと、向うに夜霧を堰き止めていた、岩屋の戸らしい一枚岩が、徐ろに左右へ開き出した。そうして其裂け目からは、言句ごんくに絶した万道の霞光が、洪水のように漲り出した。

オルガンテイノは叫ぼうとした。が、舌は動かなかつた。オルガンテイノは逃げようとした。が、足も動かなか

かった。彼は唯大光明の為に、烈しい眩暈めまいが起るのを感じた。そうしてその光の中に、大勢の男女の歡喜する声ほうはいが、澎湃と天に昇るのを聞いた。

「大日靈貴おおひるめむち！　大日靈貴！　大日靈貴！　大日靈貴！」

「新しい神なぞはおりません。新しい神なぞはおりません。」

「あなたに逆らうものは亡びます。」

「御覧なさい。闇が消え失せるのを。」

「見渡す限り、あなたの山、あなたの森、あなたの川、あなたの町、あなたの海です。」

「新しい神などはおりません。誰も皆あなたの召使です。」

「大日靈貴！　大日靈貴！　大日靈貴！」

そう云う声の湧き上る中に、冷汗になったオルガンテイノは、何か苦しそうに叫んだきりとうとう其処へ倒れてしまった。……………

その夜も三更に近づいた頃、オルガンテイノは失心の底から、やっと意識を恢復した。彼の耳には神々の声が、未だに鳴り響いているようだった。が、あたりを見廻すと、人音も聞えない内陣には、円天井のランプの光が、

さっきの通り朦朧と壁画を照らしているばかりだった。オルガンテイノは呻き呻き、そろそろ祭壇の後を離れた。あの幻にどんな意味があるか、それは彼にはのみこめなかった。しかしあの幻を見せたものが、泥烏須でない事だけは確かだった。

「この国の霊と戦うのは、……」

オルガンテイノは歩きながら、思わずそつと独り語を洩らした。

「この国の霊と戦うのは、思ったよりもつと困難らしい。勝つか、それとも又負けるか、——」

するとその時彼の耳に、こう云う囁きを送るものがあった。

「負けですよ！」

オルガンティノは気味悪そうに、声のした方を透すかして見た。が、其処には不相変、あいかわらず 仄暗い薔薇や金雀花の外に、人影らしいものも見えなかつた。

×

オルガンティノは翌日の夕も、南蛮寺の庭を歩いてい

た。しかし彼の碧眼には、何処か嬉しそうな色があった。それは今日一日の内に、日本の侍が三四人、ほうきようにん奉教人の列にはいったからだった。

庭の檜欅や月桂は、ひっそりと夕闇に聳えていた。唯その沈黙が擾されるのは、寺の鳩が軒へ帰るらしい、中空の羽音より外はなかった。薔薇の匂、砂の湿り、——一切は翼のある天使たちが、「人の女子の美しきを見て、」妻を求めに降って来た、古代の日の暮のように平和だった。

「やはり十字架の御威光の前には、穢らわしい日本の霊

の力も、勝利を占める事はむずかしいと見える。しかし昨夜見た幻は？——いや、あれは幻に過ぎない。悪魔はアントニオ上人にも、ああ云う幻を見せたではないか？ その証拠には今日になると、一度に何人かの信徒さえ出来た。やがてはこの国も至る所に、天主の御寺が建てられるであろう。」

オルガンティノはそう思いながら、砂の赤い小径を歩いて行った。すると誰か後から、そつと肩を打つものがあった。彼はすぐに振り返った。しかし後には夕明りが、径を挟んだ篠懸すずかけの若葉に、うっすらと漂っているだけだ

った。

「御主。守らせ給え！」

彼はこう呟いてから、徐ろに頭をもとへ返した。と、彼の傍かたわらには、何時の間に其処へ忍び寄ったか、昨夜の幻に見えた通り、頸に玉を巻いた老人が一人、ぼんやり姿を煙らせた儘、徐ろに歩みを運んでいた。

「誰だ、お前は？」

不意を打たれたオルガンテイノは、思わず其処へ立ち止まった。

「私は、——誰でもかまいません。この国の霊の一人で

す。」

老人は微笑を浮べながら、親切そうに返事をした。

「まあ、御一緒に歩きましたよう。私はあなたと少時の間、御話しする為に出て来たのです。」

オルガンテイノは十字を切った。が、老人はその印に、少しも恐怖を示さなかった。

「私は悪魔ではないのです。御覧なさい、この玉やこの剣を。地獄の炎に焼かれた物なら、こんなに清浄ではない筈です。さあ、もう呪文なぞを唱えるのはおやめなさい。」

オルガンテイノはやむを得ず、不愉快そうに腕組をした儘、老人と一しよに歩き出した。

「あなたは天主教を弘めに来ていますね、——」
老人は静かに話し出した。

「それも悪い事ではないかも知れません。しかし泥烏須もこの国へ来ては、きつと最後には負けてしまいますよ。」

「泥烏須は全能の御主だから、泥烏須に、——」
オルガンテイノはこう云いかけてから、ふと思いついたように、何時もこの国の信徒に対する、丁寧な口調を

使い出した。

「泥烏須に勝つものはない筈です。」

「所が実際はあるのです。まあ、御聞きなさい。はるばるこの国へ渡って来たのは、泥烏須ばかりではありませぬ。孔子、孟子、莊子、——その外支那からは哲人たちが、何人もこの国へ渡って来ました。しかも当時はこの国が、まだ生まれたばかりだったのです。支那の哲人たちは道の外にも、呉の国の絹だの秦の国の玉だの、いろいろな物を持って来ました。いや、そう云う宝よりも尊い、靈妙な文字さえ持って来たのです。が、支那はその

為に、我々を征服出来たでしょうか？　たとえば文字を御覧なさい。文字は我々を征服する代りに、我々の為に征服されました。私が昔知っていた土人に、柿の本の人麻呂と云う詩人があります。その男の作った七夕の歌は、今でも此国に残っていますが、あれを読んで御覧なさい。牽牛織女はあの中に見出す事は出来ません。あそこに歌われた恋人同士は飽くまでも彦星とたなばたつめ棚機津女とです。彼等の枕に響いたのは、丁度この国の川ののように、清い天の川の瀬音でした。支那の黄河や揚子江に似た、銀河の浪音ではなかったのです。しかし私は歌の事より、文字

の事を話さなければなりません。人麻呂はあの歌を記す
為に、支那の文字を使いました。が、それは意味の為よ
り、発音の為の文字だったのです。舟と云う文字がはい
った後も、「ふね」は常に「ふね」だったのです。さも
なければ我々の言葉は、支那語になっていたかも知れま
せん。これは勿論人麻呂よりも、人麻呂の心を守ってい
た、我々この国の神の力です。のみならず支那の哲人た
ちは、書道をもこの国に伝えました。空海、道風、佐理、
行成——私は彼等のいる所に、何時も人知れず行ってい
ました。彼等が手本にしていたのは、皆支那人の墨蹟で

す。しかし彼等の筆先からは、次第に新しい美が生まれ
ました。彼等の文字はいつのまにか、王羲之おうぎしでもなければ
褚遂良ちよすいりょうでもない、日本人の文字になり出したのです。
しかし我々が勝ったのは、文字ばかりではありません。
我々の息吹きは潮風のように、老儒の道さえも和げまし
た。この国の土人に尋ねて御覧なさい。彼等は皆孟子の
著書は、我々の怒に触れ易いために、それを積んだ船が
あれば、必ず覆ると信じています。科戸の神はまだ一度
も、そんな悪戯はしていません。が、そう云う信仰の中
にも、この国に住んでいる我々の力は、臃げながら感じ

られる筈です。あなたはそう思いませんか？」

オルガンテイノは茫然と、老人の顔を眺め返した。この国の歴史に疎い彼には、折角の相手の雄弁も、半分わからずにしまったのだった。

「支那の哲人たちの後に来たのは、印度の王子悉達多です。――」

老人は言葉を続けながら、径ばたの薔薇の花をむしると、嬉しそうにその匂を嗅いだ。が、薔薇はむしられた跡にも、ちゃんとその花が残っていた。唯老人の手にある花は色や形は同じに見えても、どこか霧のように煙つ

ていた。

「仏陀の運命も同様です。が、こんな事を一々御話するのには、御退屈を増すだけかも知れません。唯気をつけて頂きたいのは、本地垂迹の教の事です。あの教はこの国の土人に、大日靈貴は大日如来と同じものだと思わせました。これは大日靈貴の勝でしょうか？ それとも大日如来の勝でしょうか？ 仮りに現在この国の土人に、大日靈貴は知らないにしても、大日如来は知っているものが、大勢あるとして御覧なさい。それでも彼等の夢に見える、大日如来の姿の中には、印度仏の面影よりも、

大日靈貴が窺われはしないでしょうか？ 私は親鸞や日

蓮と一しよに、沙羅双樹の花の陰も歩いていきます。彼等

が随喜ずいき渴仰かつごうした仏は、円光のある黒人ではありません。

優しい威嚴に充ち満ちた上宮じょうぐう太子たいしなどの兄弟です。

——が、そんな事を長々と御話しするのは、御約束の通りやめにしましょう。つまり私が申上げたいのは、泥烏須のようにこの国に来て、勝つものはないと云う事なのです。」

「まあ、御待ちなさい。御前さんはそう云われるが、

——」

オルガンテイノは口を挟んだ。

「今日などは侍が二三三人、一度に御教に帰依しましたよ。」

「それは何人でも帰依するでしょう。唯帰依したと云う事だけならば、この国の土人は大部分悉達多の教えに帰依しています。しかし我々の力と云うのは、破壊する力ではありません。造り変える力なのです。」

老人は薔薇の花を投げた。花は手を離れたと思うと、たちまち夕明りに消えてしまった。

「なるほど造り変える力ですか？　しかしそれはお前さ

んたちに、限った事ではないでしょう。どこの国でも、——たとえば希臘の神々と云われた、あの国にいる悪魔でも、——」

「大いなるパンは死にました。いや、パンも何時かは又よみ返るかも知れません。しかし我々はこの通り、未だに生きていますのです。」

オルガンティノは珍しそうに、老人の顔へ横眼を使つた。

「お前さんはパンを知っているのですか？」

「何、西国の大名の子たちが、西洋から持って帰ったと

云う、横文字の本にあったのです。——それも今の話ですが、たといこの造り変える力が、我々だけに限らないでも、やはり油断はなりませんよ。いや、寧ろ、それだけに、御気をつけなさいと云いたいのです。我々は古い神ですからね。あの希臘の神々のように、世界の夜明けを見た神ですからね。」

「しかし泥烏須は勝つ筈です。」
オルガンテイノは剛情に、もう一度同じ事を云い放つた。が、老人はそれが聞えないように、こうゆっくり話し続けた。

「私はつい四五日前まえ、西国の海辺に上陸した、希臘の船乗りに遇いました。その男は神ではありません。唯の人間に過ぎないのです。私はその船乗と、月夜の岩の上に坐りながら、いろいろの話を聞いて来ました。目一つの神につかまった話だの、人を豕いのこにする女神の話だの、声の美しい人魚の話だの、——あなたは其男の名を知っていますか？ その男は私に遇った時から、この国の土人になりました。今では百合若と名乗っているそうです。ですからあなたも御気をつけなさい。泥烏須も必ず勝つとは云われません。天主教はいくら弘まっても、

必勝つとは云われません。」

老人はだんだん小声になった。

「事によると泥烏須自身も、此の国の土人に変るでしよう。支那や印度も変ったのです。西洋も変らなければなりません。我々は木々の中にもいます。浅い水の流れにもいます。薔薇の花を渡る風にもいます。寺の壁に残る夕明にもいます。何処にでも、又何時でもいます。御氣をつけなさい。御氣をつけなさい。………」

その声がとうとう絶えたと思うと、老人の姿も夕闇の中へ、影が消える様に消えてしまった。と同時に寺の塔

からは、眉をひそめたオルガンテイノの上へ、アヴェ・マリアの鐘が響き始めた。

×

南蛮寺のパアドレ・オルガンテイノは、——いや、オルガンテイノに限った事ではない。悠々とアビトの裾を引いた、鼻の高い紅毛人は、黄昏の光の漂った、架空の月桂や薔薇の中から、一双の屏風へ帰って行った。南蛮船入津にゆうしんの図を描いた、三世紀以前の古屏風へ。

さようなら。パアドレ・オルガンテイノ！ 君は今君の仲間と、日本の海辺を歩きながら、金泥の霞に旗を挙げた、大きい南蛮船を眺めている。泥烏須が勝つか、大日靈貴が勝つか——それはまだ現在でも、容易に断定は出来ないかも知れない。が、やがては我々の事業が、断定を与うべき問題である。君はその過去の海辺から、静かに我々を見てい給え。たとい君は同じ屏風の、犬を曳いた甲比丹カピタンや、日傘をさしかけた黒ん坊の子供と、忘却の眠に沈んでいても、新らたに水平へ現われた、我々の黒船の石火矢の音は、必ず古めかしい君等の夢を破る時

があるに違いない。それまでは、——さようなら。パア
ドレ・オルガンティノ！ さようなら。南蛮寺のウルガ
ン伴天連！

日本文学電子図書館

神々の微笑

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：『報恩記』而立社

大正13年11月15日 印刷

大正13年11月25日 発行



日本文学電子図書館